やきもの産地・新潟

ごあいさつ

令和３年度冬季のテーマ展示は江戸時代終わりから明治時代を中心とする新潟のやきものを取り上げました。令和元年度に柴澤一仁様の集められた陶磁コレクションを御寄贈いただいたことから、そのお披露目を兼ねて、あまり知られることのない新潟のやきものを御紹介するものです。

現在では、新潟県内のやきもの産地はどこか尋ねられて、すぐ答えられる方は少ないことと思います。100 年ほど前は、人々の身近に多くの窯場があり、優れた製品が作られていた意外な歴史があったことをこの展示から知っていただき、地域の歴史を見直すきっかけになれば幸いです。

本展覧会の開催にあたり、貴重なコレクションを御寄贈いただいた柴澤様はもとより、多大なる御協力をいただきました機関や個人の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和４年１月 15 日

新潟県立歴史博物館
館長　斎藤　良人

目次

ごあいさつ
新潟のやきもの作り
1　藩窯とその後継　6
2　焼酎徳利の隆盛　12
3　下越の諸窯　15
4　中越の諸窯　21
5　上越の諸窯　25
6　磁器への挑戦　28
7　東北の諸窯　32
8　九州の陶器　35
古美術収集家としての故柴澤一仁氏　38
出品資料リスト　45

本書は新潟県立歴史博物館令和３年度冬季テーマ展「やきもの産地・新潟」（会期：令和４年１月15日～３月６日）の展示記録である。
写真掲載されていない展示物が一部ある。
所蔵先の記載のないものは館蔵資料であり、柴澤コレクションには★印を付した。
執筆と編集は新潟県立歴史博物館専門研究員・西田泰民が行い、寄贈者・故柴澤氏と長年の親交があった菊地正志氏より柴澤氏とコレクションについて紹介文を戴いた。
イラスト　西田いづみ

新潟のやきもの作り

縄文土器に始まる1万年以上の日本のやきものの歴史の中で、およそ1600年前の5世紀に大きな技術の変化がありました。それはロクロと窯の技術の到来です。回転するロクロの遠心力で器をつくる方法と、窯の中で高温で焼きしめた、硬いやきもの（須恵器）を作る方法が朝鮮半島から伝わりました。そして、7世紀にはうわぐすりをかけた陶器が焼かれるようになりました。

新潟県内では7世紀の終わり頃に須恵器を焼く窯が現れ、平安時代の初期、9世紀にはそれぞれの郡に須恵器窯がありました。佐渡の小泊窯の製品は越後だけでなく、今の富山や青森まで分布するほど広まりましたが、10世紀を過ぎるとほとんどの窯は姿を消してしまいました。鎌倉時代の11世紀から12世紀にかけては、五頭山麓（阿賀野市）に陶器を焼く窯があっただけで、その後、素焼きの土器は作られていたものの、陶器を焼く窯は18世紀までなかったようです。

この長い空白期間の後、江戸時代後期から、新潟のやきもの作りが再び盛んになり始めました。1864（元治元）年刊の『越後土産』の産物番付では、おとち（新発田市乙次）、加茂、長岡悠久山、五智の瀬戸物が挙がっています。

新潟のやきもの作りのピークは1877(明治10)年頃と考えられ

ます。残念ながら、当時の窯の数を記録した県の統計がありません。最も古い 1886 年の統計では 85 もの窯が陶器を焼いていたことがわかります。その後、瓦や土管製造に切り替えたり、廃業したりして窯は減り続け、太平洋戦争前は 20 ほどになっていました。現在、統計上、食器などを生産している事業者は 1 社のみです。

		本焼窯	素焼窯	錦窯
1886	明治 19	85	62	3
1887	明治 20	80	112	3
1927	昭和 2	30	21	4
1928	昭和 3	39	19	12
1929	昭和 4	27	13	11
1930	昭和 5	28	25	11
1935	昭和 10	31	11	11
1936	昭和 11	30	10	10
1937	昭和 12	28	10	10
1938	昭和 13	25	10	10
1939	昭和 14	22	6	6

新潟県統計書より
錦窯は絵付陶磁器の窯

窯は、大まかにいうと、火を焚く場所、製品が焼かれる場所、煙の出口の３つの部分からなります。江戸時代には製品を焼く部屋を階段状に連ねた連房式登窯という形が多くの窯場で使われるよ

うになり、幕末～明治期の新潟でも同じような窯が多く見られました。

1　藩窯とその後継

18 世紀末頃から、越後ではやきものの地元生産を行う藩が現れます。新発田藩では 1796（寛政８）年に領内の小坂村で陶器を焼くことを命じた記録があり、1840 年頃の天保年間には長岡藩、村松藩、三根山藩で藩が使うやきものを焼く御庭焼が始まったようです。これらの窯では、東北や京都から招いた職人、あるいは各地で修業した職人が指導にあたり、やがて経験を積んだ職人たちが新たに窯をおこすなどして、県内にやきものの技術が広まっていきました。

小坂（おさか）焼　新発田市小坂

新発田藩第９代藩主溝口直侯（なおよし）は 1796（寛政８）年、小坂村で食器を焼くことを命じました。その後、必ずしも運営は順調ではなく、一時休業した時期もありました。佐賀・鍋島の職人であった弥惣兵衛が加わってから盛り返し、その次の代から小池姓となり、５代にわたり、やきもの作りが続けられました。小池窯は県内で最も長く続いた窯の一つです。1964 年の新潟地震が原因で窯を閉じました。

横堀焼　新発田市横堀

小坂焼と同じく新発田藩の藩窯だった窯で、新津出身で会津で修行した文吉という人物が初めの窯主だったようです。明治期に最後の窯主となった山崎繁一の名前が知られていて、1877(明治 10) 年の第 1 回内国勧業博覧会にも作品を出品しました。山崎繁一は戊辰戦争にも従軍したと伝えられています。閉窯となった理由は、羽越線開通による振動と繁一の後継者がいなかったことでした。 横堀窯のあった場所近くで行われた工事の時に遺物が出土しました。現在の地表下１ｍのところに焼けた土の層がありました。

村松焼　五泉市猪沢・搗屋小路ほか

1842(天保 13) 年、村松藩第９代堀直央（ほりなおひさ）の時、村松でやきものを焼いていた出羽出身の道川忠治を棟梁に任命して御用窯が築かれました。忠治は２年ほど村松を離れ大堀相馬（現福島県）にいた時期もありました。元々秋田の寺内（じない）窯で学んだ忠治はそれに加えて相馬の技術を村松にもたらしました。村松焼はその後、弟子に引き継がれ、第 1 回内国勧業博覧会にも出品されていますが、1879(明治 12) 年頃に窯を閉じたようです。

村松焼の陶工であった旗野嘉一が安田で始めたのが、庵地焼です。

小坂焼　個人蔵

村松焼　個人蔵

丸山焼　新潟市西蒲区峰山

三根山藩では 1845（弘化２）年に第９代藩主牧野忠直が相馬で修行した二村為八を起用して丸山窯でやきもの作りを始めました。この窯がいつまで続いたかはわかっていません。為八の子孫は、その後、県内各地で陶工として活躍しました。

新潟市による峰岡上町（みねおかかんまち）遺跡第３次調査の発掘区は、三根山藩の陣屋に近接する地域で、家老の名前が入った陶器も出土しており、丸山窯の製品が含まれている可能性があります。

六兵衛・七兵衛

京都の陶工、清水六兵衛（２代と考えられます）は長岡藩牧野忠雅に招かれ、お山焼の指導をしたのち、越後各地の窯場にも立ち寄りました。その子の初代七兵衛、３代六兵衛もたびたび越後、新潟を訪れ、滞在期間中に作品を残しています。そのため、各地でよく似た製品が作られ、京焼の技術が広まりました。

峰岡上町遺跡出土の碗には高台近くに六角形の枠に「清」の字が入った、六兵衛の刻印があります。六兵衛が三根山藩の丸山窯にいた記録はなく、どのようにしてこの碗がもたらされたのか、興味深いところです。

新潟市文化財センター蔵

お山焼　長岡市御山町

長岡藩第 10 代藩主牧野忠雅が京都所司代を務めていた時の縁で、京都から清水六兵衛を招き、悠久山でやきものを焼かせたのが始まりといわれています。長岡藩の財政難から 4 年ほどしか続かなかったようです。その後、六兵衛の弟子に技術を学んだ栖吉村の佐藤広吉が 1853（嘉永６）年､窯を再興しました。大正時代には君山窯と呼ばれていたようです。他県からの製品に押されて、４代目広吉の時、窯を閉じました。

お山焼　長岡市立科学博物館蔵

大正期絵葉書

大堀相馬焼　福島県浪江町

江戸時代、元禄年間（1688 ～ 1704）に半谷休閑（一説にその下人）が始めたと伝えられます。相馬藩が技術向上と陶工の育成に力を入れ、幕末には東北最大のやきもの産地となり、８つの村に窯元が 100 あまりもありました。馬の絵は相馬焼のシンボルとされています。東日本大震災から 10 年後の 2021 年３月ようやく浪江町に大堀相馬焼協同組合の工房、ギャラリー、事務所が開設されました。

遠く越後から出稼ぎに来て、のちに三根山藩丸山窯に起用された陶工が二村為八であり、大堀相馬焼は新潟のやきもの技術の系統の一つとされます。

2　焼酎徳利の隆盛

1860(安政６)年に阿部勘九郎が発明したといわれる内側に釉薬をかけて水漏れがしにくくした徳利は、新潟から北海道向けに出荷されていた焼酎の容器に最適でした。７～８合入りで、木の栓をして、石膏で固めてあったといいます。巻の松郷屋周辺だけでなく、阿賀野の笹岡、村岡、山崎でも大量に生産されました。最盛期の 1882(明治 15) 年頃は、松郷屋で 25 万本、笹岡・村岡・山崎で 150 万本も生産されたようです。やがて、北海道で焼酎の醸造が始まり、ガラス瓶が普及したことから、1897(明治 30) 年頃には注文がなくなっていきました。

松郷屋焼　新潟市西蒲区松郷屋

この地域の名主であった阿部勘九郎が、三根山藩に出入りするうちに、丸山窯のやきものの技術を盗み覚え、始めたと伝えられています。

焼酎徳利の注文がなくなったのちは、すり鉢、片口、行平鍋、湯たんぽなど日常の道具に加えて、タバコの葉をいぶすための葉のし甕、土管、硫酸瓶など産業に関わる製品も作られました。職人不足や燃料の薪が近くで手に入らなくなるなどして窯は減っていき、1948（昭和 23）年を最後に窯の歴史を閉じました。

徳利各種

葉のし甕

笹岡焼　阿賀野市笹岡

五頭山麓は、県内では唯一の中世の窯があった地域です。松郷屋の焼酎徳利の成功を見た小林新次郎が 1867（慶応３）年に開窯したのを契機に、徳利を生産する同業者が増え、10 年ほどの間に 6 軒となりました。小林新次郎の窯は 24 室もある超大型の窯で、年間 20 万本も焼いたと伝えられています。

しかし、1887（明治 20）年頃から焼酎徳利の注文が減るとともに、値段も大きく下がり、閉窯が相次ぎました。

村岡焼　阿賀野市村岡

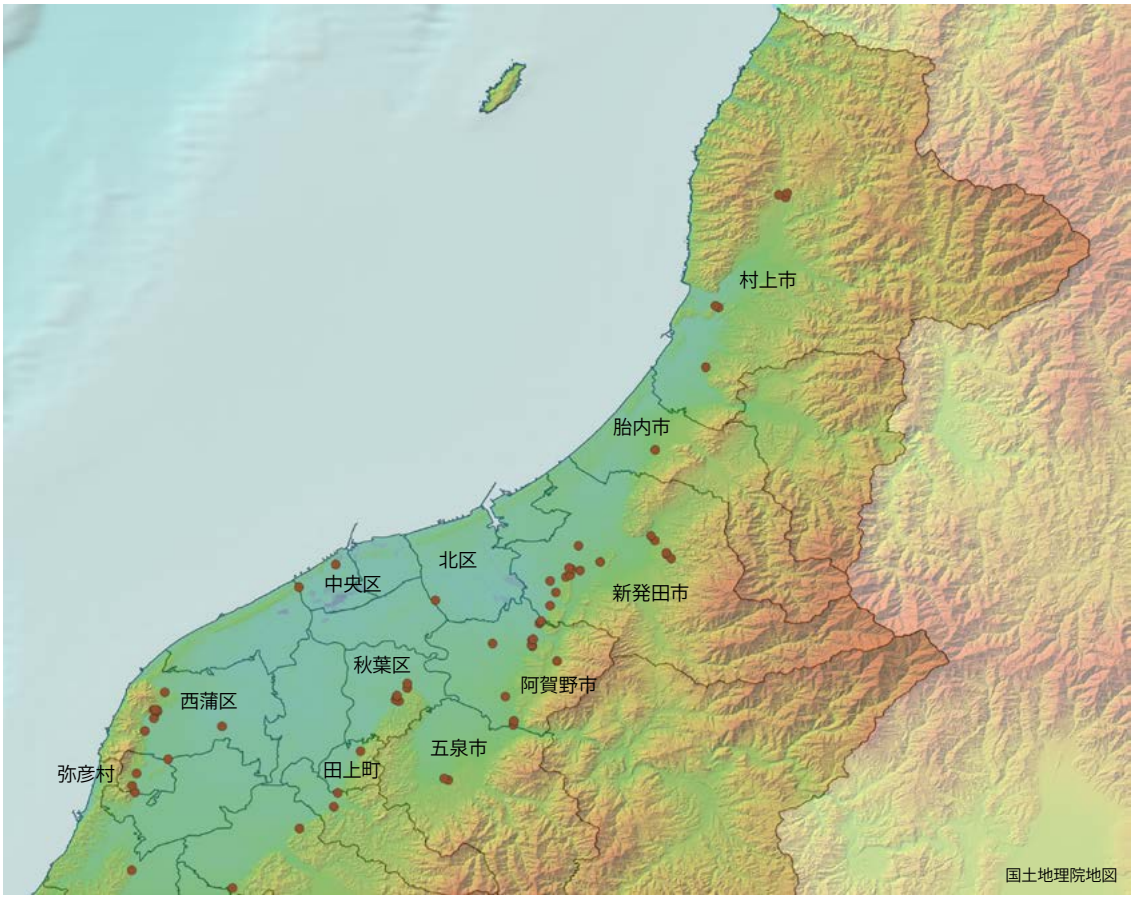
初めに窯を開いたのは渋谷六次郎で、笹岡焼と同じように焼酎徳利を生産していたとみられます。その後、渋谷窯は瓦製造に転業しましたが、長くは続かなかったようです。窯の跡地には瓦片が大量に堆積しています。

中高窯はやや遅れて 1899（明治 32）年頃に開かれ、焼酎徳利も製造しました。松郷屋の陶工を雇ったので、製品はそっくりです。ヤママスの刻印は発注者の焼酎業者を表しています。後継者がなく 1935（昭和 10）年に廃窯となりました。

笹岡焼、村岡焼（右端）

3　下越の諸窯

窯が集中するのは、新発田市の真木山周辺、阿賀野市の五頭山麓、安田周辺、新潟市秋葉区および西蒲区です。



中条焼　胎内市東本町

新発田市横堀焼の山崎繁一の弟である山崎幸八が明治初期に中条に移ってやきものを始めました。陶器のほか、人形を焼き、鳥坂人形とよばれていたようです。２代続きましたが、後継者がなく窯を閉じました。太平洋戦争中から戦後まもなくにかけて、金属が不足した時期には、陶製のかまどを製作していました。

赤坂焼　阿賀野市六野瀬

陶器を焼いた西潟窯と小田窯、素焼きの横山窯、熊倉窯がありました。

西潟窯と小田窯は明治時代前期から常滑系の技術を用いて甕を主として製造し、窯場の南を流れる阿賀野川を使って各地へ出荷しました。甕には、水を溜める、漬物をつける、米や種子を保存する、染料を溜めるほか、便槽に使うなど今のタンクの役割もありました。

西潟、小田両方の窯ともに太平洋戦争後は土管製造に切り替えました。

花立焼　新発田市下石川

近くに夫婦坂という坂があったため、夫婦焼と呼ばれたこともあったようです。窯があったという言い伝えがあるだけで、窯主もその操業期間もわかっていません。

字花立で区画整理が行われた時に採集された陶器破片類は、この窯の遺物だと考えられます。

中条焼（素焼）　個人蔵

常 設 展示室の雪国のくらしの雑貨屋にならんでいる大甕は、展示のために小田製陶所に製作してもらったものなんじゃ。

土器ぼうず

赤坂焼（熊倉窯）個人蔵

太丘焼　新潟市北区太子堂

江戸時代に庄屋をしていたことのある原家の原隆治が屋敷内に窯を設けて始めました。その時期について明治初めとする説もあります。「太丘造」の銘があるため、太丘焼と呼ばれます。

阿賀野市安田や村岡などから土を取り寄せ、京都から陶工を雇って、製作にあたらせました。第 1 回内国勧業博覧会では、出品作品が宮内省お買い上げとなりました。1880（明治 13）年には六兵衛、七兵衛を迎え、大いに盛んな時期がありましたが、事業不振のため、20 年ほどで閉窯となりました。

★

★

新津焼　新潟市秋葉区滝谷本町など

1858（安政 5）年、会津若松、須賀川、白川、米沢、松郷屋で修行を重ねた西潟藤市がそれまでにあった窯を継ぎました。日用器、花器のほか記念品の皿や茶碗も多く製造し、1917（大正 6）年には分家の西潟窯が独立しました。現在は、押味くみこ氏が西潟製陶所 6 代目を継いでいます。

二村窯は三根山藩丸山窯の二村為八の弟利七が 1889（明治 22）年頃に開き、1912（明治 45）年には分家が独立しました。その後、二村本家は土管製造、分家は植木鉢専門となりましたが、現在は窯を閉じています。

新津焼
左　柴澤コレクション
右　個人蔵

中村焼　個人蔵

中村焼　新潟市秋葉区中村

美濃川窯は美濃川林蔵が明治初めに始めたといわれています。緑の釉薬を使った織部風の製品を多く製造しました。1901（明治 34）年、新潟市で開催された一府十一県連合共進会（物産博覧会）で作品が表彰されました。３代続きましたが、４代目となるべき後継者が太平洋戦争で召集され、閉窯となりました。

関根窯も幕末から明治の初めに開かれた窯と考えられます。日用品を主に製造しました。この窯では３代目が 1932（昭和７）年の満州事変で召集され、閉窯となりました。

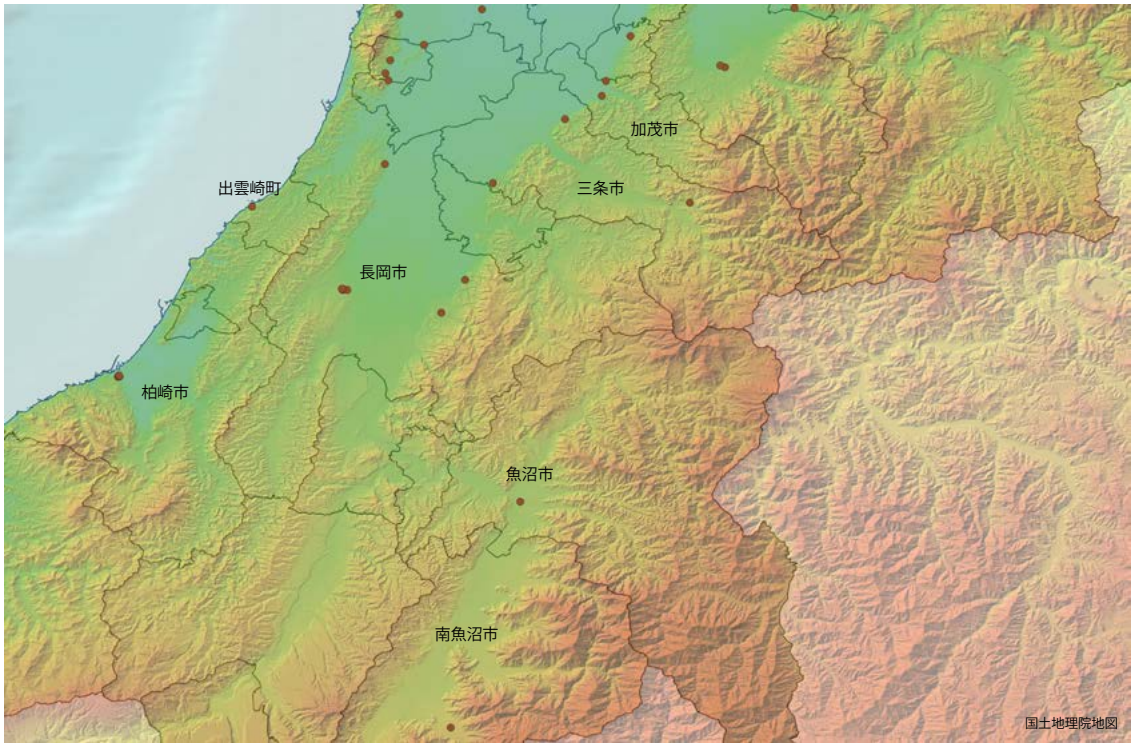
朝日焼　新潟市秋葉区朝日

新津焼の二村利七の弟子であった伊藤九八郎が始めました。初代は鉢、皿、徳利、すり鉢、油壺などの生活用品を焼いていましたが、二代目になってからは素焼製品を主に焼き、花卉栽培の盛んな新津や小須戸向けに植木鉢を多く生産していたようです。日中戦争が始まり、食料生産が優先される世情におされ、窯を閉じました。

個人蔵

4　中越の諸窯

加茂や長岡には江戸時代からの窯がありましたが、下越に比べると、窯の数は少なく、魚沼地域にはほとんどありませんでした。



麻生田焼　長岡市麻生田

地元の殖栗林八が近くで得られる良質な土を使って始めた窯で、表面に凹凸のある「いぼ焼」が特徴です。第 1 回内国勧業博覧会で入賞したのも、この「いぼ焼」の製品だったと考えられます。窯を閉じた理由はわかっていません。

また、高巻平太郎という絵師がいたことが知られていて、その製品には「高」の字を渦巻きで囲むサインがあります。漢詩が書かれている作品も多く、教養のある人物であったことが想像されます。

麻生田焼　長岡歯車資料館蔵

★

★

★

高安寺焼

高安寺焼　三条市高安寺

木津忠蔵が慶応年間（1865 ～ 1868）に始めたとの説が知られていますが、一方その 20 年ほど前から既に窯があり、忠蔵はそれを改築したとの説もあります。忠蔵は、松郷屋の阿部勘九郎と付き合いがあったためか、焼酎徳利を作っていた時期もありました。清水六兵衛、七兵衛はここでも指導をしたため、太丘焼、大久保焼とよく似通った製品があります。

1898(明治 31) 年、北越鉄道が開通すると、大量に県外のやきものが流通するようになって、経営が厳しくなり、1903(明治 36) 年忠蔵が亡くなった後、瓦製造に転換しました。

関原焼　長岡市関原町・上除町

清水窯、荒木窯、砂山窯と素焼きの丸山窯がありました。

清水窯には、清水六兵衛がお山焼の指導の時に立ち寄ったとされるので、1843（天保 14）年には窯があったことになります。「越後の瀬戸場」として知られていましたが、明治末に閉窯しました。

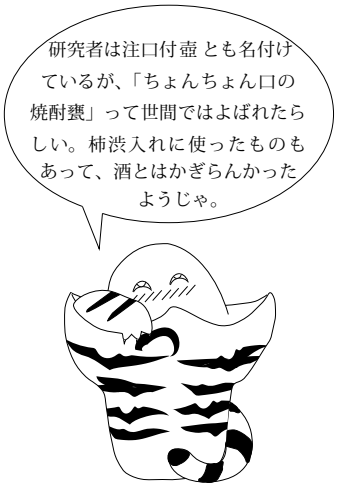
荒木窯は幕末頃に開窯し、1878（明治 11）年の明治天皇北陸巡幸の時、宮本の休憩場所にこの窯の大植木鉢が飾られました。

大久保焼　柏崎市緑町

西川窯は江戸時代に遡るといわれていますが、詳しくはわかりません。1880（明治 17）年に清水七兵衛が太丘焼での指導ののちに、西川窯で技術指導を行ったので、双方の窯で非常によく似た製品が作られました。

そのほかに、中西窯、永井窯がありました。

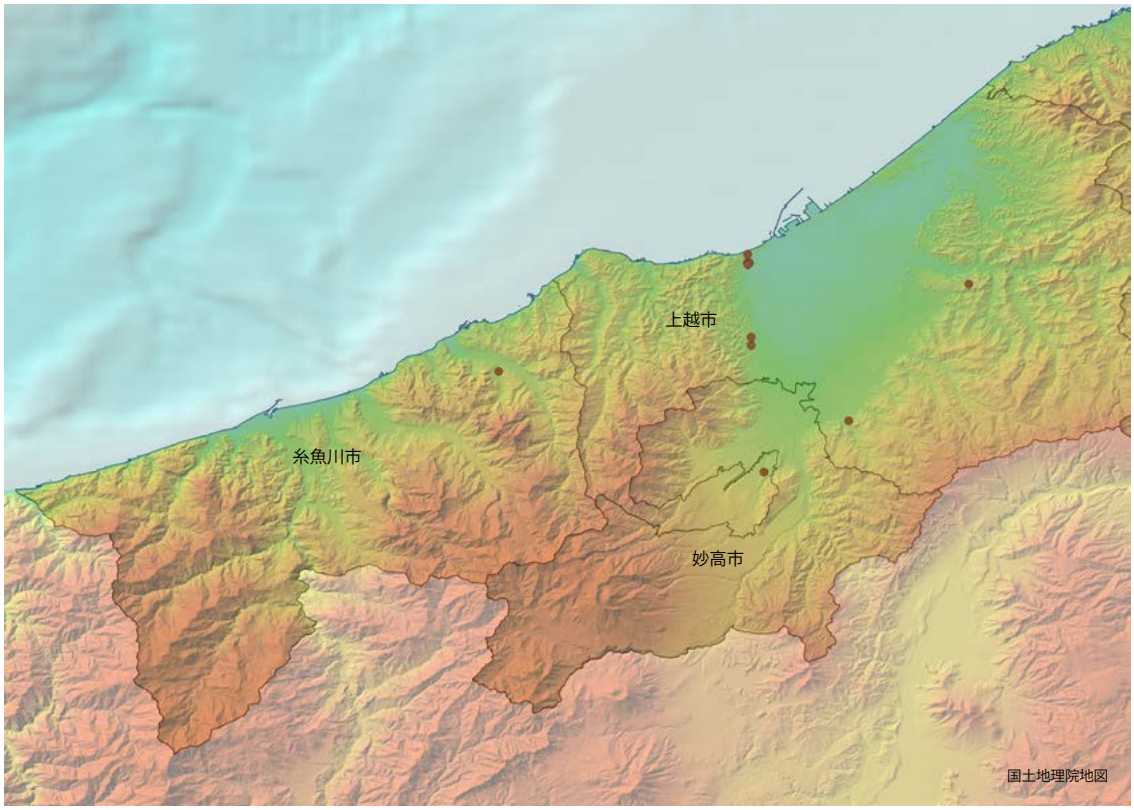
関原焼　（奥３点　柴澤コレクション）



大久保焼　○個人蔵

5　上越の諸窯

中越よりもさらに窯の分布はまばらです。やきものの生産を続けるには良質な粘土、豊富な燃料、運搬手段と販路、資金が必要です。上越地域にはこうした条件を満たす場所が少なかったのかもしれません。



五智焼　上越市五智など

五智国分寺周辺で江戸時代後期からやきものが作られていました。森元窯が 1839（天保 10）年、岩片窯が 1841（天保 12）年に相次いで開窯しました。共に第 1 回内国勧業博覧会に出品をしました。岩片窯は 1948（昭和 23）年まで 3 代続きましたが、森元窯についてはいつまであったのか分かっていません。1889（明治 22）年、国分寺裏門の向かい、当時の国道 8 号線に面して高野久太郎（弓山）が窯を開きました。日用品に加えて、参拝客向けに土産の人形も作っていました。1942（昭和 17）年、2 代で閉窯となりました。

阿古陀水指　高野弓山作

向橋（むかばし）焼　上越市向橋

1914（大正 3）年刊行の『高田市史』に、磯野という人が京都から陶工を招いて、向橋村の粘土を使ってやきもの作りを試みたが、土質がよくなかったので、しばらくして廃窯となった、と書かれています。

向橋の集落を流れる儀明川沿いにやきもののかけらが見つかる場所があり、この記述に対応すると考えられます。

井の口焼　糸魚川市平

糸魚川市能生の谷あいにある集落で、湯尾家が陶工を雇ってやきものを焼かせていたといわれます。陶工はたびたび代わったと考えられ、その出身地については、九州の唐津系、京都系、越中瀬戸系などいろいろな説があり、謎の多いやきものです。

個人蔵

6　磁器への挑戦

高級なやきものの磁器をつくるには、陶石という特別な材料と技術が必要です。磁器を焼く技術は 16 世紀まで中国にしかありませんでしたが、17 世紀初めには九州の有田で発見された陶石を使って、日本でも磁器が作られるようになりました。高級品の生産をめざし、新潟県域でも、県内外の材料を使って、いち早く磁器作りに取り組んだのが太丘焼でした。大正時代には村上焼、三光焼、大宝焼がありましたが、いずれも長続きしませんでした。

太丘焼の磁器

製陶法の改良に取り組んでいた太丘焼の原藤兵衛は 1880(明治 13) 年、新たに京都で 15 名の職人を雇い、六兵衛と七兵衛も迎え、新たな窯を築いたと伝えられます。

翌年には、大須戸（村上市）でとれる白土から磁器を作ることに成功しました。さらに、天草（熊本）や信楽（滋賀）の土を調合して磁器を量産しました。見事な絵付の作品が残されています。

村上焼　村上市羽黒

佐藤市衛が、京都、九谷、会津など国内各地から陶工を集めて始めた窯で、村上陶器製造所と称していました。村上市大須戸の土を使った白磁が製品の主になっていました。村上堆朱の彫師による彫刻のある作品が見事です。薄手の白磁製品の焼成技術の開発に取り組んでいましたが、資金が尽き、閉窯となりました。

個人蔵

三光焼　新発田市上三光

三光には江戸時代から明治時代にかけて窯があったようですが、年代や窯主の名はわかっていません。

大正時代に地元の渋谷昌（さかん）が会津本郷の陶工を雇って新たに窯を始めました。土は三光の白岩と本郷の白土をまぜ、白磁や染付を製造しました。製品の底部には「三光山」の銘があります。

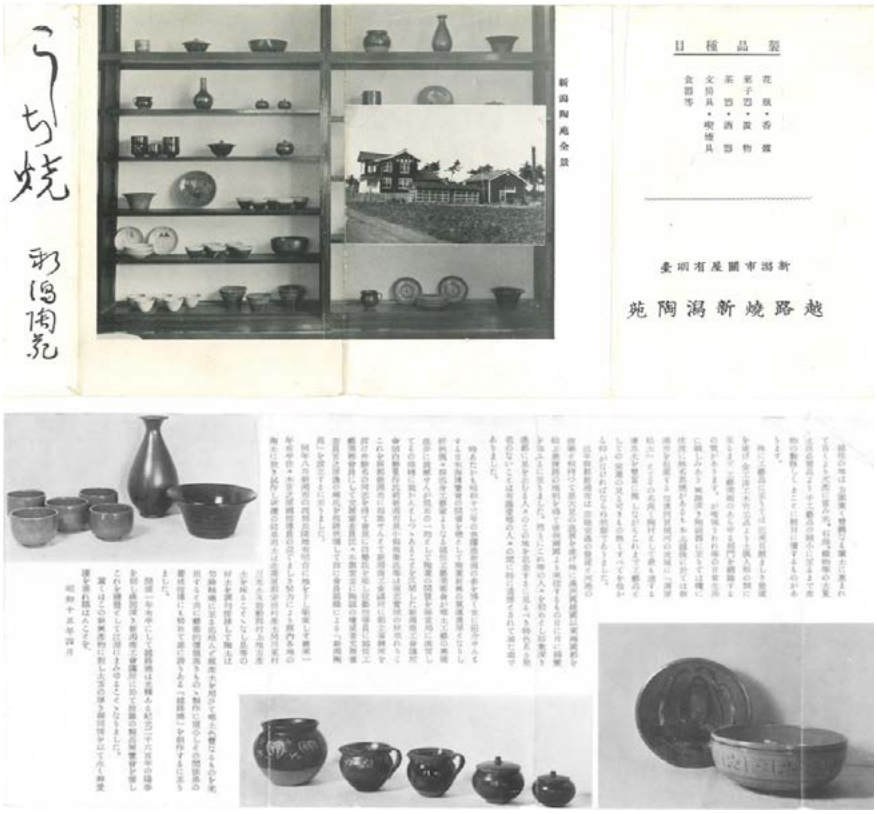
個人蔵

越路焼　新潟市中央区関屋付近

蝋型鋳金作家として人間国宝となった佐々木象堂（1882-1961）が提案し、財界の協力を得て設立された製陶所である新潟陶苑の製品です。安田や村上、三光の土を使い、生活用具より美術工芸的作品を目指していました。この製陶所の出身者に、田村吾川や長浜数右衛門がいます。1945（昭和 20）年春に土地が軍用地として買収され、解散しました。

佐々木は戦後、佐渡に真野山焼窯を創設して陶芸家の育成にあたりました。

個人蔵



7　東北の諸窯

東北地域で江戸時代に早くからやきもの作りに力を入れたのが会津藩で、会津本郷焼が 17 世紀中頃に開窯し現在も続いています。その後、17 世紀後半には相馬藩で大堀相馬焼、仙台藩で堤焼が、18 世紀には米沢藩の成島焼、秋田藩の白岩焼・寺内焼が開窯するなど、新潟県域より古い歴史を持ち、今なお伝統が続く窯もあります。19 世紀開窯の窯は、山形の平清水焼、新庄東山焼、秋田の楢岡焼などが知られています。

東北のやきものは新潟のやきもの作りとの関わりが深く、柴澤氏のコレクションには多くの東北のやきものがあります。

会津本郷焼　福島県会津美里町

東北最古の窯場といわれます。1645（正保２）年、会津藩主・保科正之が招いた瀬戸出身の陶工・水野源左衛門が本郷村で、本格的に陶器製造を始めました。その後、佐藤伊兵衛は秘密とされていた有田焼の白磁製造技術を習得して戻り、1800（寛政 12）年、本郷の大久保陶石を使って白磁の焼成に成功しました。会津藩の支援により発展した本郷焼は戊辰戦争後一時衰えましたが、明治時代中期には海外にも輸出するほど復興しました。

会津の伝統料理、にしんの山椒漬けをつくるための鉢じゃ。水漏れがしにくく、塩分や酸にも強い、飴釉という釉薬がつかわれているぞ。

会津本郷焼（磁器）

新庄東山焼　山形県新庄市

蒲原郡小杉村（現在の新潟市江南区亀田）出身の涌井弥兵衛は 1816（文化 13）年から大堀（福島）を皮切りに、仙台、平清水（山形）、寺内（秋田）、大宝寺（山形）など各地の窯で技術を習得しました。さらに 1841（天保 12）年、京都に向かおうとして、新庄に立ち寄った時に、製陶業を興そうとしていた新庄藩の要望を受入れて、瓦師として召し抱えられました。以後、陶器生産の発展につくし、2 代目からは弥瓶を名乗ることとなり今日まで続いています。

陶器の湯たんぽは江戸時代からあったのじゃが、こんな筒型の湯たんぽは西洋のものを真似て、明治時代から現れたということじゃ。

８　九州産陶器

北前船で西日本から運ばれてきた商品の中にはやきものもありました。伊万里焼として知られる肥前地域の磁器だけでなく、各地で作られた陶器の甕にも生活用品として高い需要がありました。ここでは、柴澤氏のコレクションから、鹿児島の苗代川焼と佐賀の古武雄の甕を紹介します。

古武雄（こだけお）　佐賀県武雄市

弓野焼、二川焼、武雄唐津などと呼ばれていたやきものの総称です。唐津焼の系統で、白の化粧土を塗った上に、緑と褐色の釉を使って松や草の紋様を描くのが特徴です。東南アジアにも輸出されていました。

苗代川焼　鹿児島県東市来町

1598（慶長３）年、島津義弘が朝鮮半島から多数の陶工を薩摩に連れて帰り、彼らが住みついたそれぞれの場所でやきものの流派が生まれました。苗代川焼はその一つです。

鉄分の多い陶土を使い、黒褐色に仕上がる黒薩摩は庶民向けのやきもので、「くろもん」と呼ばれました。

1605 ～

古美術収集家としての故柴澤一仁氏

柴澤氏は、古伊万里の収集家の間では知らない人はいないほど、とても有名な方であった。それは収集の量や質からではなく、佐渡に伝世した何の変哲もない数枚の小皿が日本で最初に作られた染付磁器である「砂目積み」の伝世品であることの第一発見者であり、かつ所有者であったからだと思う。

柴澤氏は、東北から九州、沖縄までの地方窯（民窯）の収集家としても知られていた。県内の巻の松郷屋焼の焼酎徳利や豊栄の太丘焼に早くから注目し、収集していた。彼の目で選び抜かれ、愛玩された焼物は、今日ではなかなか手に入れることが難しくなってきている。今後ますます貴重なコレクションとなっていくであろう。

生前、氏はよく私に「自分が生涯かけて収集したものが死後散逸することだけはしたくない」「できれば生まれた土地にお返ししたい」と話していた。その気持ちが通じたのか、古伊万里は、佐賀県立九州陶磁文化館で、また県内を中心とした民窯は、新潟県立歴史博物館で保存・展示してもらえることとなり、たいそう喜んでいることと思う。

私は、柴澤氏とはやきものを通じ、約 25 年の付き合いであった。その間、幾度となく一緒に東京などへ出かけたものだが、そこで彼について感じたことは、彼は一度話しただけで相手を十年来の友達であるような気持ちにさせてしまう不思議な魅力のある人柄だったということである。それが彼の収集の原動力となったのではないだろうか。

日本陶磁協会
菊地正志

柴澤コレクションが掲載された出版物

県内窯跡分布図

40 年ほど前に新潟県内の近世から近代の窯を自ら巡って調査し、『越後の陶磁』（1976 年刊）にまとめられた石川秀雄氏が作成した地図です。

このテーマ展示は石川氏の研究成果を参考にしています。

窯跡の調査

幕末～近代の窯跡の現状の確認と遺物の採集を行っており、その一部を紹介します。

この時代の窯跡は埋蔵文化財として保護の対象となっていないものがほとんどです。すでに操業していた時のことを知る人はいなくなっており、工事や災害で失われる可能性がある窯については、調査を急ぐ必要があります。

村上市大行窯

長岡市金ヶ崎窯

関原焼清水窯跡の発掘調査

2021 年夏、長岡市関原町一丁目に所在する清水窯跡で小規模な発掘調査を行いました。

窯の本体は確認できませんでしたが、焼成失敗品などを捨てた土層から、さまざまな製品、窯道具類が出土しました。

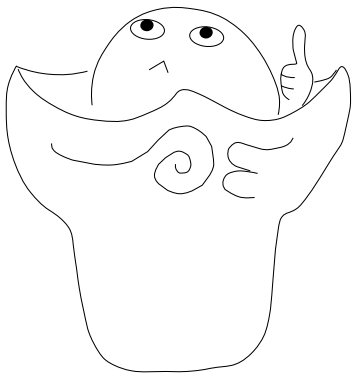
発掘区西壁断面

出土陶器

窯道具

窯にやきものを詰める時に使う道具で、熱が高いところに置くため、やきもの同士がくっつかないようにするため、灰がかぶらないようにするためなど、いろいろな種類があるのじゃ。

関原焼清水窯出土

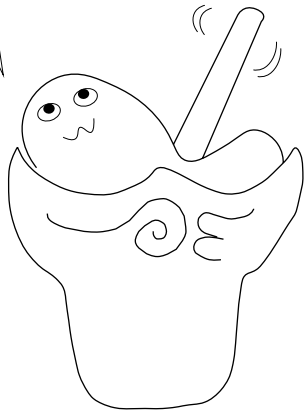


すり鉢いろいろ

新発田市加治万代窯

阿賀野市田村窯

100年くらい前までは、味噌はすり鉢ですってから使うのが当たり前だったし、魚のすり身やすりごまは自家製だったので、今よりずっとすり鉢の出番が多かった。だからどの窯でもすり鉢をつくっていたというわけじゃ。



村上市大行窯

加茂市松原窯

長岡市砂山窯

新潟市岩室窯

出品資料リスト

1　藩窯とその後継			5　上越の諸窯		
	小坂焼	個人蔵		五智焼	館蔵
	村松焼	館蔵、個人蔵		向橋焼	館蔵
	お山焼	長岡市立科学博物館		井の口焼	個人蔵
	横堀焼跡出土品	新発田市教育委員会	6　磁器への挑戦		
	三根山藩出土陶器類	新潟市文化財センター		太丘焼	館蔵
	大堀相馬焼	館蔵		村上焼	個人蔵
2　焼酎徳利の隆盛				三光焼	個人蔵
	松郷屋焼	館蔵		越路焼	個人蔵
	村岡焼	館蔵	7　東北の諸窯		
	笹岡焼	館蔵		会津本郷焼	館蔵
3　下越の諸窯				新庄東山焼	館蔵
	中条焼	個人蔵	8　九州の陶器		
	花立焼窯跡採集品	新発田市教育委員会		古武雄	館蔵
	太丘焼	館蔵		苗代川焼	館蔵
	赤坂焼	小田製陶所			
	新津焼	個人蔵	関原焼清水窯出土陶器		館蔵
	朝日焼	個人蔵	関原焼清水窯出土窯道具		館蔵
	中村焼	個人蔵	県内各地の窯跡採集すり鉢		館蔵
	産地不明徳利	館蔵	県内各地窯跡の踏査		
4　中越の諸窯				大行窯	館蔵
	麻生田焼	長岡歯車資料館		金ヶ崎窯	館蔵
	高安寺焼	館蔵		万代新田窯	館蔵
	関原焼	館蔵			
	大久保焼	館蔵、個人蔵			

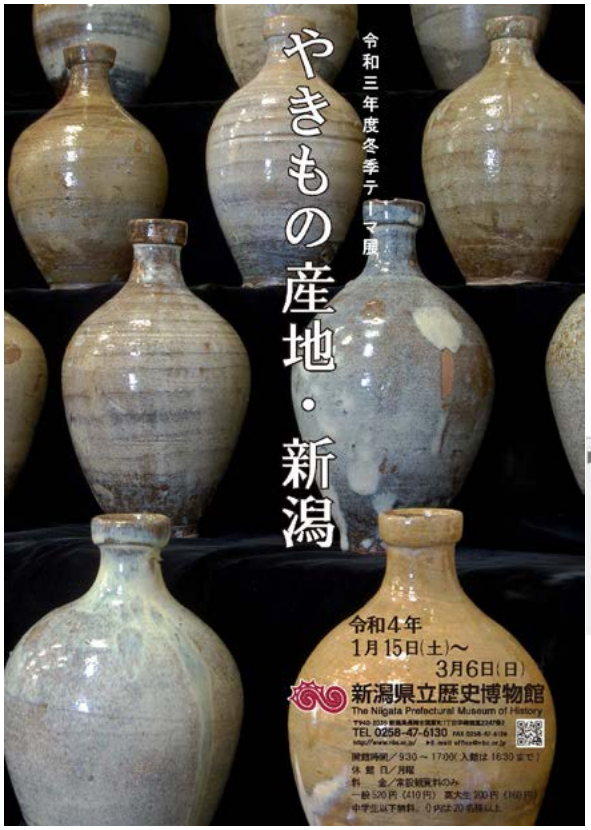
謝辞・協力一覧

下記の関係諸機関及び個人の皆様より御協力や御助言をいただきました。
記して、感謝申しあげます。

伊藤克助、内山弘、小田正雄、小田健一、川住定栄、菊地正志、木津信雄、佐藤隆一、柴澤繁子、清水朝子、鈴木暁、寺﨑裕助、平丸誠、広井造、皆川保夫、山崎隆
新発田市教育委員会、長岡市立科学博物館、長岡歯車資料館、新潟市文化財センター（50 音順・敬称略）

主な参考文献

石川秀雄　1976 『越後の陶磁』雄山閣
石川秀雄　1982 「越後・佐渡のやきもの」『日本やきもの集成　2　東海・甲信越』平凡社
石川秀雄　1986 『新潟やきもの浪漫』新潟日報事業社
伊藤信太郎　1972 「「井の口焼」備忘録」『頸紀新聞』308-315 頁
紀　興之編　1860（元治元）『越後土産　初編』
小林茂右衛門　1980 『土と焔』
栄村誌編さん委員会編　1982 『栄村誌　民俗・文化史料篇』栄町
佐々木一禄　1987 「殖栗窯の麻生田焼」『長岡郷土史』24　122-128 頁
関根達人・木戸奈央子　2018 「越後産焼酎徳利(「松前徳利」)の生産と流通」『中近世陶磁器の考古学』8、163-184 頁、雄山閣
豊浦町史編さん委員会編　1987『豊浦町史』 豊浦町
田中暁穂　2019 「7 近世 6 在地生産 2 窯業」『新潟県の考古学 III』新潟県考古学会 245-248 頁
長岡市立科学博物館　1981 「特集・御山焼」『長岡市立科学博物館報』 No.39
新潟市文化財センター 2015『峰岡上町遺跡第 3 次調査』新潟市教育委員会
平丸　誠　1981 「五智焼 高野久太郎について」『頸城文化』40　上越郷土研究会　82-87 頁
平丸　誠　2021 「五智焼の古窯　岩片窯について」『頸城文化』69　上越郷土研究会　146-152 頁
巻町郷土資料館編　1983 『松郷屋焼館蔵品目録』巻町郷土資料目録 5
松 下　亘・氏家　等・笹木義友　1978 「焼酎徳利について」『開拓記念館研究年報』 6　北海道開拓記念館　47-63 頁
三井田忠明　1988 「柏崎大久保窯業の諸相」『柏崎市立博物館館報』 8　 115-149 頁
安田町史編さん委員会　1997 『安田町史 民俗編』安田町


令和三年度冬季テーマ展
やきもの産地・新潟
令和4年
1月15日(土)～
3月6日(日)
新潟県立歴史博物館
The Niigata Prefectural Museum of History
TEL 0258-47-6130
開館時間／9:30 ～ 17:00（入館は16:30まで）
休館 月／月曜
料 金／常設観覧料のみ
一般 520円（410円） 高大生 200円（160円）
中学生以下無料。0円は20名様以上

下越の諸窯
焼酎徳利の隆盛
中越の諸窯
上越の諸窯
県内窯跡出土品
高宮寺焼
松崎焼焼
落窯とその後継
太左焼
大彩松高焼
万松焼
高級品への挑戦
東北の諸窯
九州産陶器
展示会場での写真撮影は自由です（一部を除く）。ただし、三脚やフラッシュを使用した撮影はご遠慮ください。また、周囲のお客様に配慮のうえ撮影ください。
新潟とやきものの産地のイメージはまず結びつかないことでしょう。火焔型土器を生み出した新潟には長いやきもの作りの歴史がありますが、全国に名だたる産地となることはありませんでした。しかし、幕末から明治初期にかけて年間 100 万本以上生産された焼酎徳利をはじめ、県内各地にやきものを焼く窯が 80 箇所ほど存在した時期があったといわれています。北前船の運んだ遠国の製品とともに、地元のやきものが人々の生活の場にありました。また、内国博覧会へ出品された作品が宮内省お買い上げとなったほど、質の高い製品も作られました。その後、九州や東海などの大生産地の製品の流通や、ガラス瓶の普及、食生活の変化などから、窯のほとんどが姿を消してしまい、それが存在したことは人々の記憶から失われてしまっています。
そのような近代のやきものの歴史に焦点をあて、近年寄贈をうけた枝柴淳一氏の収集品を中心に、博物館が調査した窯跡資料を含めて展示します。
同時開催 火焔街道 2022
信濃川火焔街道連携協議会（新潟市、三条市、長岡市、十日町市、魚沼市、津南町）は、文化財を通した地域振興と広域観光を推進しています。その活動の一環として、日本遺産「なんだ、コレは！」信濃川流域の火焔型土器と雪国の文化」から火焔型土器など、豪快なれ（うつわ）した造形のやきものを厳選して紹介します。
新潟県立歴史博物館

編集・発行　新潟県立歴史博物館
令和５年３月 31 日 a
許可なく文章、写真の転載を禁じます。
©Niigata prefectural museum of history 2023